# 「もっと海を！」Mehr Meer——ヨーロッパで多言語世界の文学を考える

## 対談・朗読　イルマ・ラクーザ×多和田葉子

報告　山口裕之

二人の作家イルマ・ラクーザと多和田葉子による対談・朗読会の夕べ「もっと海を！」は、二〇一三年一一月八日、総合文化研究所主催により同研究所にて行われた。ラクーザはスロヴァキア生まれ。スロヴェニア人の父とハンガリー人の母との間に生まれて、幼少期をブダペスト、リュブリャナ、トリエステで過ごし、ついで一家でスイスに移住、現在もチューリヒに暮らしている。作家・批評家としての活動とならんで、ロシア語、セルビア・クロアチア語、ハンガリー語、そしてフランス語からドイツ語への翻訳活動（とりわけツヴェターエワやマルグリット・デュラス）は特筆すべきものである。一方の多和田葉子は、よく知られているように早稲田大学でロシア文学を学んだ後、ドイツに渡り、ハンブルク、そして現在はベルリンにて、日本語およびドイツ語によって非常に精力的な作家活動を繰り広げている。「もっと海を！」というこの対談・朗読会のタイトルは、直接的には、二〇〇九年のチューリヒ書籍賞を受賞したイルマ・ラクーザの著作 Mehr Meer の書名にちなんだものでもあるが、それと同時に、サブタイトルにもあるように、何よりも多言語多文化のはざまにあり、国と国を隔てているものであると同時につないでいるもの、そしてまたそれ自体がつねに動いているものがそれによってイメージされている。

結びつけるものであると同時に分断するもの、すべてを等しいものとするのではなく、むしろ差異を保たせるもの、そしてそれを越えて新しい体験を可能とさせるもの——このような「海」や「境界」のイメージが、冒頭の対談のなかで二人の作家の個人的体験を通じて語られることになった。そして、そのイメージはそのあとの朗読の部においてもそのまま引き継がれていった。朗読は、1．イルマ・ラクーザ『もっと海を』からの三つの章、2．多和田葉子の作品、3．ツヴェターエワの二つの詩、の三部からなっていた。ラクーザの「国境」の章については、本人の朗読に加えて、当日参加していた学生によって日本語訳も朗読、また、ツヴェターエワの詩については、原文のロシア語、ラクーザによるドイツ語訳、そして、この日のためにこれらの詩の日本語訳を用意してくれた所員の前田和泉（ロシア文学）が、自らの翻訳を朗読することによって、同じ詩のロシア語、ドイツ語訳、日本語訳の響きを感じ取ることができた。

「もっと海を！」を掲げたこの対談・朗読会は、実際、まさに「海」というイメージをめぐりながら、さまざまな文化・言語のあいだを行き交うものとなった。この催しが終わった後に寄せられた複数の方々の感想からも強く確信したのだが、おそ

らくこの満員の会場に居合わせたすべての人にとって、ここでの時間はきわめて刺激に満ちたものになったのではないかと思われる。

以下において、この日朗読された作品のうち、ラクーザ『もっと海を』から「海辺で」「シエスタの部屋」「国境」の三つの章の日本語訳、およびツヴェターエワの二つの詩のそれぞれについて、ロシア語、ドイツ語訳、日本語訳を紹介したい。

＊　＊　＊

イルマ・ラクーザ『もっと海を』から　　山口裕之 監訳 註

(Ilma Rakusa, Mehr Meer. Erinnerungspassagen. Graz-Wien: Literaturverlag Droschl, 2009)

海辺で　*Am Meer*

リュブリャナ、それは霧と褐炭のにおい、褐炭のにおいと霧でもあった。霧の下でキノコが繁殖し、風邪が流行った。カフェ・ヨーロッパでは少なからず不機嫌な雰囲気が漂っていた。*Then we were heading towards the sea.*（その時、私たちは海の方へ向かっていた。）

カルスト地帯にくると突然、天候が変わる。霧の靄（もや）はそのまま残り、石灰の大地の上にマツの黒い輪郭が浮かび上がった。カシやビャクシン、ハリエニシダ。赤土。ガレ。遠くに点々と見える集落の教会の塔は尖っていない。教会の塔ではなく鐘楼だ。地中海的な雰囲気がする。

私は息を呑んだに違いない、この初めての海を前にして。今でもなお、北方に行って目を閉じると、あの明るい海の広大さが見えてくる。潮の匂いを嗅ぎ、波が岸を打つのを耳にする。そして世界は平穏に存在している。自然と唇が「O」の形を作ってしまう。

水、風、温もり、石、白、青、貝、海藻、ツルニチソウ、月桂樹、ローズマリー、ブドウ、キョウチクトウ。また、子ども用ブランコやファラオ［トランプゲーム］、ミラマーレ城や魚や船。あるいはこんな感覚だ。

子どものころの四角形には
灯台や入江
城やツゲ
ベランダや狐の
メルヒェン、浜辺や
イストリアの砂、父さん、
母さん、それに寄せて砕ける波
アイスキャンデイや風がある
でもカルストからは何の不安もやってこない

ある幸せな思いを速記でとどめたものだ。そこには、実際、たくさんの顔がある。海のように、空のように、分断された都

市のように。A地区は連合国に、B地区はユーゴスラヴィアに管理されていた。私たちはA地区に住んでいた。ミラマーレ方面にあるバルコラに。牡牛の血のように真っ赤な屋根の家だ。その当時の南部鉄道が走る陸橋の上方にあり、急勾配のサン・ボルトロ通り沿いに立っている。庭と東屋があり、朝を告げて鳴く雄鶏がいた。上の階からは海の眺め。浴室は隣のアパートに宿泊しているアメリカ人将校の一家と共用していた。二つの新しい言語が私の耳に刺激を与えた。英語とイタリア語だ。英語は私にとっていつまでも未知の世界の言語だった。イタリア語は隣の家の娘で猫背のヴィオレッタや浜辺の子供たち、市場の露天商の女性たちから教わった。

私はどんどん学んだ。コルクベルトをつけて泳ぐこと、ヴィオレッタとおしゃべりすること、市街電車に乗ること、向かい風に逆らうこと。私はくたくたになるまで学び、父と母に挟まれて、子供らしくぐっすりと眠った。

私たちの目と同じ高さで陸橋を通り過ぎる列車も、私は怖くなかった。昼でも夜でも。列車はおもちゃのように水平線に向かって滑るように走り、見えなくなった。

庭には何の魔法の力もなかった。狭く、荒れ果てていて、緑色のがらくた置き場のようだった。ツゲや何本かの無花果の木があり、野菜が少しばかり植えられ、まばらな草叢の中では雄鶏がただ一羽、不満そうに地面を引っ掻いていた。

私は庭に行きたいとは思わなかった。せいぜい藤が鬱蒼と茂ったベランダに行くくらいのところだった。私は海に行きたがっていた。いつだって海に。写真に写る私はくるぶし丈のハンガリー風の子羊の皮のコートを着て、毛糸の帽子をかぶり、バルコラの防波堤の上に立っている。寒くて風が強かったに違いない。私は額にしわを寄せている。しかし天候など私を海から引き離すことなどできない。せいぜいボーラが一番強く吹くときくらい。私のトリエステでの子供時代は、バルコラの岸とミラマーレ城が立つ岬を半円形に縁取る、石灰の白い岩壁の上で繰り広げられた。大きく、いろいろな形のブロックの間では、水がゴボゴボ、シューッと音を立てたり、眠気を誘うようにモゴモゴと言ったりした。一方で、私のまなざしは水平線に船の姿を捜し、あるいは海の青さの中に消えていった。

夏には毎日のことだった。海水浴バッグに荷物を詰めて一〇時に下の岩場に降りてゆく。母と私は一番平らな所を選び、白雪姫と七人の小人の絵が描いてあるシートを広げて、ゆったりと横になったり座ったりできるようにした。母は私の背中に、私は母の背中にクリームを塗り、それから母は本を取り出して私に読み聞かせてくれた。メルヒェンに出てくる悪魔たちは、今では打ち寄せる波間にいる。本を読んでくれているとき、母の声はとても自然に海の音と結びついていたので、私はいつもきまって眠ってしまうのだった。いつの間にか太陽と私たちの周りのにぎわいで、私は目を覚ました。岩場はすでに人でにぎわっていた。遊歩道では退職した老人たちが小さなキャンピングテーブルを置いてチェスをしているか、持ちよった軽食を食べていた。海の中では子どもたちがはしゃぎまわり、ときどき犬も一緒にいた。熱さとまぶしい光でぼうっとなって、私はすぐにでも海に入りたかった。母は私にコルクのベルトを巻いて、私の首を濡らし水の中へと優しく押した。そして母もあとに続いて入ってきた。

ここで語っているのは、風のない日のことだ。そんな日は、海が鏡のようになめらかで、うねるような波もない。もしくは軽い波しかない。海は泡立ちながら揺れ、ときおり少し冷たい水の流れもあった。ちっぽけな魚がキラキラ輝いた。私は歓声を上げた。

これで満足ということはなかった。

岩場の間にいくらか砂浜があり、そこでとても素敵なものを見つけた。突然両足が地面をしっかりととらえ、両手は貝殻をつかもうとした。貝殻を湿った砂から拾い集め、きらきらひかるまで洗った。壊れた貝殻は役に立たない。全てのふち、模様、光沢、形の整い具合が大事だった。

これで満足ということはなかった。

昼間が区切られる。太陽が天頂にくると、牡牛の血の色のように真っ赤な家に戻ることになっていた。あのひんやりとした、タイルの敷き詰められた部屋に。私たちは軽く食事をし、それからシエスタの時間になった。切り離された時間。ゆっくり・ダウン・カーム・ダウンと落ち着いてゆく時間。シーっという声。その声で音もなく素早く動き回るトカゲも隠れてしまった。ただ光のウサギだけが床の上でゆらめいていた。

おやつにスイカを食べた後、母は海水浴バッグを背負い、私たちはまた元気に海へと急いだ。海はもう赤っぽい柔らかな光を帯びていた。海辺は大にぎわいだった。海に入らない人は岩の上で日向ぼっこをするか岸辺を散歩していた。大人も子どももいた。兵士も散歩をしている人たちに交じっていた。母の麦わら帽子は午後の海風に揺られている。私は激しく息をはずませるイルカのように、何度も泳いだ。あるいはゴムボートに乗って揺られていた。そして私は、岩場にうつぶせになって水のなかをじっとのぞきこんだ。水は黒みを帯びて石に打ちつけ、水面が上がったかと思うとまた下がっていった。呼吸だ。そんな思いが頭をよぎった。海が呼吸している。そして海藻を揺り動かしている。私は岩の間の暗がりをのぞき、鳴り響く音に耳をすませた。それはときおり轟きのように聞こえた。あたかも私の下で動物が動いているかのようだ。眩暈がして岩が揺れるように見え始めるまで、私はそうしていた。それから私は目を閉じた。

目をもう一度開けると、傾いた日差しに目が眩んだ。火の玉のように太陽は水平線の上にある。そして、赤い帯を海の上に投げかけていた。何艘かのボートがそこを滑るように通り抜けてゆき、暗く陰った場所に呑み込まれていった。岸辺の騒音は次第に静まりを見せ、その頃、入江は紫に染まった。老人たちのキャンピングテーブルも片づけられる。岩場には誰もいなくなった。母と私は黙ったままだ。私たちは急いでいなかった。海風が涼しい夜の風に変わるころになってようやく、母は私の肩に手を置いた。そして私たちはそこをあとにした。空にはもう三日月が掛かっていることもあった。

家に帰る途中、海水とツタの渋いにおいが混じりあったにおいを嗅ぐだけで私は時間を言い当てることもできただろう。草木は深く息をついていた。

疲れた？　海辺での長い一日の終わりに、母はよく私を街に連れて行き、父を迎えに行って一緒に晩御飯を食べた。私はお腹が空いていた。でももっと楽しみだったのは、プラタナスに

覆われた九月二〇日通りで食べるアイスだった。コーヒーのかかったバニラアイスのボールに極薄のワッフルがさしてある、あのコルネットやベルリーナだ。

夜の一〇時。木々の雀たちはまださかんに騒いでいた。その下にある通りは、人で溢れかえっている。南の地での散歩は、はしゃぎつつも、気だるい雰囲気。若い人も年配の人も。散歩が映画館で終わることもめずらしくなかった。父は映画館から眠っている私を運び出すのだった。

## シエスタの部屋　*Das Siestazimmer*

静けさの中ですべてが同時に起こった。
イメージたちが部屋に掛かっていて、
それらがいつまでも続いていくこともありえた。

アンジェイ・スタシュク

ここが私の子供時代の中心だった。鎧戸が下ろされた部屋、シエスタの時間のためだ。私は一人だが、眠ってはいない。身体を伸ばしてベッドの上にいる。頭は起きているのだが、何もしてはいけないと言いつけられている。つまり、静かにしていること。休まなければならないこと。私はこの切れ目の時間が好きではない。白昼のこの薄暗さが。だが決まりは決まり。私はもう静かにしている。静かに。そうすると、それは突然起こる。静寂は長く続くほど、雄弁になる。声の断片、かすかな葉のざわめきが聞こえる。どこか遠くで犬が鳴いている（動物も寝ているのに）。何かが軋む。向こうで、トイレの水が流れている。私の耳はそれらの物音を焼結し、吸い込む。そして緊張したまま、さらに耳を澄ませる。Viaggio（旅たち）。それともハンガリー語で vigyázz（気を付けて）か。誰がどこで話しているのか？　誰と？　何のために？　聞こえてくるものが曖昧であるほど、さらにあれこれ思いをめぐらせた。わたしはもうもごもごと口に出して呟いている、文や会話を。「私は行くよ。」「旅に出るの？」「そうと言えるね。」「どこへ？」「南米へ。」「船で？」「船で。」「長い期間？」「多分。」沈黙。「勇気があるんだね。気を付けてね。」あっというまに別れが来る。別れについてはよく心得ている。でも、ちょっと出まかせを言った。なじみの領域に入っていくために、少しばかり作り話をした。

もちろん、見知らぬものに気をそそられることもある。そして、私は想像を膨らませながら、それらを集めていく。ステラが、三つの帆のマストが三本ある黒い船で、海賊にさらわれるさまを。不思議なことに、海賊たちは彼女になんの危害も加えない。ステラは魚を焼き、服を繕い、それによって得るものといえば毎日夕日を眺めることだけ。海賊どもがステラを故郷へ連れ戻したときには、彼女の肌は船乗りのように焼け、赤みがかった髪は金のように輝いていた。ステラ、わたしたちの星、と幸せに包まれた両親はステラを迎えた。海賊どもは光る歯をにやっと剥き出し、彼らに手を振って、大海へと漕ぎ出していった。

白昼夢のなかで私は世界を創造していた。そしてそのほかの時間のことは忘れ去っていた。暗くされた部屋にもうどれだけ

いたのだろう。実際は暗いわけでも、活気がないわけでもないこの部屋に。けれどもすぐに目は暗闇に慣れ、天井のひび割れがつくる網目模様やタイル張りの床をさっと飛び跳ねていく光のウサギを目で追っていった。鎧戸の隙間からはいつも、少し明かりが漏れていて、光の筋が揺らめいたり斑状に震えたりしていた。それらのお芝居を見ていると飽きることがなかった。あれはヤギの頭か、それともロバの横顔か。見ることが意味を呼び寄せ、そして突然、部屋はにぎやかになる。動物やその他の生き物で。囁くのがもう聞こえてくる。その度ごとにカメラ・オブスキュラが魔法の部屋に変わっていくのを体験し、私は一人の時間を楽しむのだった。そのうちにワインレッドのタイルさえ喋りはじめる。ひとしきり彼らのおしゃべりをきいてから、私は足の裏でそれに触れてみる。その冷たい表面で足を滑らせながら、点々とある光の斑は避けていく。ゲームボードのような床、動かすことのできる模様でできた床。

シエスタの部屋は私の王国だった。そこへ入りこんでくる現実は薄められ弱められて、私の想像力は離陸することができた。一方から他方が決められていく。鎧戸がなければどんな空想の旅もできない。鎧戸が少し光を通すことによって私はいわば自分自身に辿りつくことになった。空高くを飛ぶことや、ラビリンスのように入り組んだ道にも勇気を持つことができた。もちろん、私の思考が堂々巡りしてしまうこともあった。そうなるといくらか窮屈で、部屋さえ縮み始めた。自分を解き放ってやって、強情な考えを騙してやらなければならなかった。しばしば歌の一節に助けられて、思考はそこから漕ぎ出していく。頭のなかにある海での自由な船旅に。

この二時から四時のあいだの時間は、私の秘密だった。母は私が寝ていると思っていた。いずれにせよ、どのように時間を過ごしたかわたしに訊いてはこなかった。母に呼ばれると、思いっきり伸びをして、白昼夢を振り払う。何も言わない。

外の光で目が眩んだ。すべてがあまりにまぶしく、あまりにうるさく聞こえた。私はその暗さのニュアンスや光と影の濃淡に慣れてしまっていて、日の光はあまりに刺激的に感じた。世界が痛かった。

時がたつにつれて、シエスタ部屋は隠れ家となっていった。それは私を守ってくれる空間だった。その多孔性の膜に囲まれて、私は安全と自由を感じていた。ここで私は自分の着想を綴り、突然の閃きを体験した。

私は、鎧戸の子どもだった。

## 国境　*Grenzen*

それはほんとうにどこにでもあった。トリエステ周辺に行きたいときは、A地区からB地区へ移動しなければならなかった。さらにリュブリャナに行こうと思えば、また新たな国境があった。どこでも証明書類を見せる。検問だ。私たちの車の後部座席から、たいていは、毛布にくるまれ、夢うつつに国境警備隊員を、敬礼する兵士を見た。遮断機が下がったり、上がったりした。時々、スーツケースをぞんざいに引っ掻き回されることもあった。私は、さらに深く毛布にうずくまった。だが、この奇妙な行為が終わるやいなや、すぐに周りを見回した。国

境の向こうでは、何かが違うのだろうか、木はもっと大きく育つのだろうか、人々はもっと親しげな顔をしているのだろうか、そして、彼らの話すことを私もわかるだろうか。

これらの国境は矛盾するもの、二つに分けるものだった。これらは、異様で、不気味で、不安が忍び寄ってくるようなものだったが、しかしまた魅了するものでもあった。私は、国境を私の好奇心をそそる緊張の場所として経験した。一方で慣れ親しんだものとそうでないものとのあいだに障壁を作りだした。私にカーテンの端を少しめくり、フェンスの穴から向こうを覗き見て、遮断機を越えて向こうの様子をうかがわせるようにそそのかすものだった。他方でそれは通過地点であって、厄介ごとの種であり、そして二つの領域の接点であった。私は、それらの秘密を予感していたが、本能的にこれらが相対的なものであることも感じ取っていた。国境は、越えられるためにあるのだ。

私たちは、父の姉妹を訪ねるために頻繁にリュブリャナへ行った。一二〇キロメートルの荒れたカーブの多い道。旅は、二回国境を越えることから始まった。そしてたいてい夜に同じように終わった。おそらくそのせいか、とても遠くまで旅をした気分になった。私たちは、さまざまな障害を乗り越えていった。国境は波頭のようで、そこではすべてが堰き止められて集中し、そして重なりあっていく。時間もそうだ。最高潮に達した後は、弛緩の時間が訪れたが、なにかが変わっていた。

人気のない地域もあった。カルスト地帯で、石がごろごろしておりやせている。給油所があったかどうか、覚えていない。覚えているのはただ、この未開の、手つかずの自然だけ。夜に一度、ウサギを轢いてしまったことがあった。父はそれをトランクに入れて、ある農夫にあげた。

これらの旅の記憶は、私の中で入り交じっている、あまりに多すぎるからだ。今でも私は、道を暗闇のなかに手探りで探していた車のライトが目に浮かぶ。道路には白い側線もなければ、センターラインも引かれていない。あるのはただ暗闇と穴ぼこ。ときどき私たちの車はその穴に入ってガタッとなった。

車輪の交換もした。無人地帯に停まる居心地の悪さ。そもそも先に進めるのか、あるいは、どうすれば進めるのかよくわからない時の。（私たち三人のうち、誰が神への信頼の気持ちをもっていただろうか？）走っているほうが停まっているよりまし、そんな決まり文句を私はすぐに理解した。

ある夜、おそらくザグレブへ向かっていた時だろうか、ある男が私たちに手を振って無理矢理停車させた。逃げているヤツらを見なかったか。逃げているヤツ？　泥棒が私のブドウ畑を荒らしたんだ。そう遠くにはまだ逃げていないはずだ。いや、私たちは、誰にも会わなかった。彼は後ろに下がって、諦めたように両方の手をおろした。

泥棒という言葉は、そのあと何日にもわたって私の想像をかきたてた。寂しい道を進んでいるとき、この言葉は真夜中、私に襲いかかり、眠っている私をたたき起したのだった。それはつまり、人を脅かす恐怖そのものである。それは、突然現れてもおかしくないものだった。ほらそこの次のカーブの向こうに。

今日にいたるまで私は夜間の運転を避けている。異質なものが、夜によって倍増され、私を不安にする。私の中にいる子供

が、危険を察知するのだ。

私は、いつもどこかに旅をしている子どもだった。
車のすきま風のうちに私は世界を発見した。そして、それが風に消えていくさまを。
今を発見した。そして、それが溶けていくさまを。
私は、到達するために走り去り、また走り去ってゆくために到着する。
私は、片方の毛皮の手袋を持っていた。それを持っていた。
父と母がいた。
子供部屋はなかった。
だが、三つの言語、私には三つの言語があった。
移っていくために、こちらから、あちらへと。
検問官が険しい顔でじろりと見ると、私は指を髪に突っ込んだ。
髪の毛が制服をじっくりと眺めた。
制服への光は露出過度になっていた。
そんなふうに先に進んでゆくことができた。そしてそのように進んでいった。
国境のはざまには、ほとんど遊びの余地がなかった。
いちど大はしゃぎすると、それでちょうどいいくらい。
ほんのいちどだけ。
そして、子豚を川のほとりで焼くには。
あるいは、乾いた車輪の跡を天へと駆けていくくらいしか。
そうすると、車輪の跡はまたすっくと立ち上がった。
そして時間は、慣れのうちへと消えていった。
左には別れ、右には到着。
そのあべこべでもある。

註

二〇一三年一月八日に行われた多和田葉子とイルマ・ラクーザの対談・朗読会「もっと海を！」のために、山口裕之がこの年度開講していたゼミ「文学と翻訳」の参加者たちが、朗読会で予定されていたこれらの章の翻訳を分担して担当し、山口も手を入れながら、それを授業のなかで検討してゆくことによって、これらの翻訳を作り上げていった。最終的に、学生たちが「確定」とした表現を山口が変更したところもある。

＊　＊　＊

## マリーナ・ツヴェターエワの二つの詩

## MARINA CVETAEVA

Кто создан из камня, кто создан из глины,
А я серебрюсь и сверкаю！
Мне дело – измена, мне имя – Марина,
Я – бренная пена морская.

Кто создан из глины, кто создан из плоти –
Тем гроб и надгробные плиты...
– В купели морской крещена – и в полете
Своем – непрестанно разбита!

Сквозь каждое сердце, сквозь каждые сети
Пробьется мое своеволье.
Меня – видишь кудри беспутные эти ? –
Земною не сделаешь солью.

Дробясь о гранитные ваши колена,
Я с каждой волной – воскресаю !
Да здравствует пена – веселая пена –
Высокая пена морская !

23 мая 1920

Marina Zwetajewa

Einen schuf er aus Stein, einen aus Lehm -
und funkelnd wie Silber mich !
Verrat ist mein Werk und mein Name - Marina,
flüchtiger Meerschaum bin ich.

Einen schuf er aus Lehm, einen aus Fleisch -
sie alle enden im Grab, entstellt...

Doch ich bin im Meer getauft
und im Flug unaufhörlich zerschellt !

Durch jedes Herz und durch jedes Netz
bricht sich mein Eigensinn Bahn.
Siehst du meine wildwirren Locken ? -
Erdensalz bin ich niemals.

Und schlag ich mich wund an granitenen Knien,
aufersteh ich mit jeder Welle!
Es lebe der Schaum, der fröhliche Schaum -
der hohe Meerschaum, der helle !

23. Mai 1920

(Übersetzung: Ilma Rakusa)

マリーナ・ツヴェターエワ

ある者は石から創られ　ある者は土から創られた
けれどわたしは銀色に輝く！
裏切りこそがわたしの業わざ　わたしの名はマリーナ
わたしははかない海の泡

ある者は土から創られ　ある者は肉から創られた
彼らには棺と墓碑銘を与えよ……

——わたしは海で洗礼を受けた——そして飛びながら
絶えまなく打ち砕かれた！

どんな心も　どんな網も
この気まぐれはすり抜けてゆく
わたしを——乱れたこの髪が見えるでしょう？——
地の塩になどできはしない

あなたたちの膝の岩に砕かれても
ひと波ごとに——わたしは甦る！
泡を讃えよ　朗らかな泡を
気高い海の泡を！

一九二〇年五月二三日

（前田和泉訳）

О поэте не подумал
Век – и мне не до него.
Бог с ним, с громом. Бог с ним, с шумом
Времени не моего!

Если веку не до предков –
Не до правнуков мне: стад.
Век мой – яд мой, век мой – вред мой,
Век мой – враг мой, век мой – ад.

Сентябрь *1934*

Nicht nach dem Dichter fragt die Zeit -
und mir ist sie völlig fremd.
Was soll der Krach, was soll der Lärm,
dieses ganze Elend !

Fragt die Zeit nicht nach den Vätern,
sind mir die Enkel gleich: Vieh.
Die Zeit - mein Gift, die Zeit - mein Leid,
die Zeit - mein Feind, meine Qual ist sie.

September 1934

（Übersetzung: Ilma Rakusa）

時は詩人のことなど
考えもしなかった——私もそれどころではなかった
私のものでない時代の
轟きもざわめきも　私にはどうでもいい

時は過ぎ去った人々のことなどおかまいなし
私も未来の者たちの群れなどどうでもいい
時は毒　時は悪

時は敵　時は罪

一九三四年九月

（前田和泉訳）